

第 11 回新潟急性腎不全治療研究会

日 時 平成 16 年 10 月 14 日 (木)
午後 6 時 30 分～
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館
2 階 大会議室

I. 一 般 演 題

1 多彩な臓器症状を呈したつつが虫病の 1 例

細島 康宏・山崎 肇・佐伯 敬子
宮村 祥二

長岡赤十字病院内科

症例は 59 歳女性。

【既往歴】特記事項なし。

【現病歴】4, 5 年前から犬の散歩で十日町の信濃川河川敷を毎日歩いていた。

平成 14 年 4 月 15 日頃から食指不振および全身倦怠感が出現。4 月 20 日から発熱, 4 月 23 日から全身皮疹が出現したため, 当院に入院した。右上腕の刺し口よりツツガムシ病が疑われ, その後のツツガムシ抗体陽性より確定診断となった。

入院時, 血圧 70/36mmHg, BUN 95.2mg/dl, Cr 6.58mg/dl, Plt $6.3 \times 10^4/\mu\text{l}$, FDP 38.3 $\mu\text{g}/\text{dl}$ と急性腎不全および DIC と診断した。MINO 200mg/day, Nafamostat 200mg/day, 輸液, 利尿剤の投与を行ったところ, 利尿もつき Cr は低下傾向であった。しかし 3 病日目に冠攣縮性狭心症を併発, その後無尿となり CHDF を 2 日間施行した。その後さらに, ツツガムシ脳症によると思われる意識障害, 膵炎, 門脈血栓症を次々に併発したが, 上記の治療を継続し約一ヶ月程度で改善をみた。新型ツツガムシ病は古典型と比べ一般的に軽症例が多いとされるが, 重症化する例もあり,

早期診断, 早期治療が必要と思われる。

2 ポリミキシン吸着が有効であった肝細胞癌切除後の ARDS の 1 例

井口清太郎・山本 卓・風間順一郎
西 慎一・成田 一衛・下条 文武

新潟大学第二内科

症例は 71 歳の男性。肝細胞癌のため当院第一外科に入院, 肝切除術を施行された。術後, 出血性ショックを契機に急性呼吸促進症候群 (ARDS) を発症した。心原性ショックによる肺浮腫を否定しきれないものの全身状態が悪化したためにポリミキシン吸着 (PMx) を 20 時間施行したところ, 尿量が増加し呼吸状態も著明に改善した。ARDS に対する治療としてはまだ定まったものがないのが現状である。ポリミキシン吸着は循環動態を改善させるとともに, ARDS の際に重要な働きをしていると考えられる活性型単球の数を減らすなどの効果が考えられている。本症例でも循環動態の改善との区別は明確ではないが, ポリミキシン吸着が著効し, ARDS を救命し得た。今後, ARDS の治療選択肢の一つとしてポリミキシン吸着を考慮すべきであると考えられた。

3 急性心筋梗塞回復後急性腎不全となった片腎患者の 1 例

岩永 明人・長 賢治・本間 則行

県立新発田病院内科

症例は, 嘔気・嘔吐, 下痢, 食欲不振を訴えて来院した 60 歳男性である。既往歴として, 10 年前, 腎細胞癌にて左腎を摘出されていた。また, 直前まで急性心筋梗塞にて当院循環器科にて入院していた。この時, 抗血小板薬, H2 ブロッカー, 抗高脂血症薬, 降圧薬等を処方されていた。検査所見にて, K 8.1mEq/l, BUN 88.8mg/dl, Cre 11.17mg/dl であり, 急性腎不全と考えられた。尿生化学の結果より, 腎実質性急性腎不全が疑われた。さらにその原因として腎毒性をもつ薬剤による急性尿細管壊死を疑い, 必要最低限の薬剤以外